

# 大学部活動における学生アスリートの学習に関する研究

生涯スポーツゼミナール 1315033 鈴田成

## 1. 研究動機・研究目的

2018年5月、日本大学アメリカンフットボール部選手による悪質タックル問題が起きた。これにより、学生アスリートのおかれている現状や、それを取り巻く大学の制度、管理体制の不備など様々な問題が浮き彫りとなり、大きな注目を集めた。米国では、「アスリートの前に学生であること」という理念の下、設立されたNCAA（全米大学体育協会）において、学生の本分である学業優先のための仕組みづくりを推進している。例えば、NCAAが定める成績評価値(GPA)が基準の成績より下回ると、練習・試合などの運動部の活動に参加できない、各運動部の全体練習の時間制限（週毎の練習時間、休養日の設定）などのルールが設けられている。また、ルール違反があった場合における罰則（出場停止処分）も設けられている。現在の我が国でも、米国のNCAAのように、学生を第一とする制度づくりを図り、大学横断的かつ競技横断的統括組織の設置が検討されている。そこで、本研究では、「部活動と学業の両立」すなわち「文武両道」の観点から、スポーツ推薦によって入学したアスリートに焦点を当て、学生アスリートの学習環境についての調査を行い、検討考察を行うことで、平等かつ健全な大学スポーツの発展に貢献することができると考え、本研究に着手した。

## 2. 研究方法

本研究では、学生アスリートの学業への取り組み、セカンドキャリアが問題視される中で、現代の学生アスリートが、実際にどのような意識をもって学業と部活動の両立を図っているのか、また、その割合はどのような要因からなっているのかを検証するため、特徴の異なる、国内の国公立大学合わせて6校の、体育会の部活動に所属している学生を対象に学生アスリートの学習環境に関して、ウェブアンケートによる調査を行った。

	国・私立	学部	各大学の特徴
A 大学	国立	体育	国内唯一の国立の体育大学
B 大学	国立	文・理	旧帝大の一角。
C 大学	国立	文・理	地方国立大学
D 大学	私立	文・理	国内トップクラスの総合私立大学
E 大学	私立	体育	教員の育成に強い体育系学部を持つ私立大学
F 大学	私立	体育	伝統ある体育系私立大学

アンケートの有効数は、大学別で見ると、A 大学が 21、B 大学が 20、C 大学が 21、D 大学が 20、E 大学が 92、F 大学が 29、合わせて 203 であった。また、学生アスリートの部活動と学習に対する意識の違いを図るために、「勉強について」と「部活動について」の質問を 6 つずつ設け、「1. 全くそうは思わない～5. 全くその通りだと思う」までの 5 段階で回答してもらった。

### 3. 主な結果と考察

今回の調査では、5段階で評価された回答をもとに、勉強と学習への取り組みを点数化することで比較を図った。ここでは、主に大きな差がみられた「大学」「競技レベル」「入試形態」の三つの属性について触れることとする。競技レベル別では、全国大会レベルの学生を除いて、「学業への意識」が高い結果となった。これは、スポーツが今後のキャリアに直接関わってくる、世界大会レベルの学生は自身の将来の糧になるような知識や経験を積極的に学ぶ姿勢を持っており、「学業への意識の向上」につながっていることが考えられる。以上のように、「学業への意識」は競技レベルに比例しない。一方で、入試形態別では、一般入試に比べ、AO・スポーツ推薦など、学力テストなしに競技成績を利用して入学した学生は、「学業への意識」が極端に低い結果となった。また、大学別では、国立大学や偏差値の高い私立大学の学生のほうが、体育系の学部に所属する学生に比べて、「学業への意識」が高い結果となった。さらに、国立大学や一般私立大学に比べ、体育系学部の大学では、一般推薦・スポーツ推薦で入学した学生の割合が高いことから、スポーツ推薦制度による「学生アスリートの学業意識の低下」に繋がっていることが考えられる。

### 4. 結論

今回の調査では、部活動へ取り組む、意識レベルに応じた「学習環境」「学習への取り組み」「学生の求める学習」など、現代の学生アスリートのもつ「学業への意識」を改めて明らかにすることができた。また、スポーツ推薦や一般推薦・AO入試制度を利用した学生アスリートの学業に関する実態を明らかにするなど、大学スポーツを考える際に大きな問題とされる問題についても言及することができた。今回の調査だけでは、すべての実態を把握、改善することができるとは言えないが、大学スポーツ業界の抱える大きな問題について、学生目線の立場からの評価を集め、考察を行うことができたのは今後の大学スポーツ業界の発展への大きな一歩といえるだろう。また、大学スポーツは、課外活動の一部である部活動を中心として成り立っており、学生アスリートはあくまでも「学生」であることを忘れてはならない。学生の本分は「学業」であり、「学業」なしに学生アスリートとしての活躍は保証されないのである。「競技成績のみで自分の未来が変わる」そんな日本の学生スポーツ文化は、本来の学生の「学び」を大きく妨げるものであり、日本のスポーツ文化が評価され、今後大きな発展、産業化へと進むためにも解決しなければならない大きな問題であることは間違いないだろう。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

4年間の大学生活の集大成として卒業論文を書き終えた今、大学生活の終わりが近づいてきたことを実感している。この4年間、最も熱心に取り組んだ大学スポーツの発展に、この論文を執筆するという形で、何かしらの形で貢献をすることができ非常に満足している。また、人々の生活とスポーツを結びつける「生涯スポーツ」について学ぶことができたことは、今後の人生において考えられる、生活・健康・生きがい・娯楽といった非常に重要な財産になることは間違いない。最後に、本論文の作成にあたり、ご多忙の中、多大なご支援と適切なお指導を頂いた黒須充教授に深く感謝申し上げます。